324
435

始

36.10.23

7551
324-435

# 一切経の由来

大正
4. 3. 18
内交

# 題辭

三河國、寶飯郡、御津村、字御馬の入覺寺といふは、吾輩嘗て住職せしことある寺院である。この寺に於て、本年四月中旬を期し、宗祖、親鸞聖人の六百五十回忌を延修するから、參詣の人人に、配賦するやうなものが欲いとのことであつた。これまでの著述の中で、何乎といふことを、現住村上流情より申して來たのである。

されど是れはと思ふものがない。そこで親鸞聖人の御傳を書くか、或は眞宗の教義に就いて、少し筆を執つて見たいと思はんでもなかつた。然るに何をいふにも日間がない。

しかのみならず、又こゝに斯ういふことを考へた。親鸞聖

人の御傳を書いたものや、眞宗の教義を書いたものは、澤山ある。然るに一切經の由來を、解り易く書いたものは未だ一部も出來て居ないと謂ふことに氣が附いた。

凡そ眞宗も、禪宗も、日蓮宗も、佛教各宗擧つて、其の本を問へば皆一切經である。喩へは、今の水藥や散藥は、昔の煎藥に異なり、餘りに苦くもない、又辛くもない、何人も至つて呑み易く、又それ〳〵の病に適するやうに出來て居る。然りと雖も、之を製造せし本を問へば、種々の植物や動物の中よりして、眞に藥となるべきものばかりを、搾り取り錬り上げたものである。

そんな工合に、どの宗旨でも、皆祖師方が廣く一切經を吟味して、其の中より、こゝぞと思召すところを、搾り取り、練り上げたものが、即ち佛教各宗の教である。近くは禪宗の如き、或は「教外別傳」と説き、不立文字「と教へて居るにも似ず。支那に於て、一切經を開板することに最も苦心せし人は、密藏禪師である。又我が日本に於て、一切經開板に最も努力せし人は鐵眼和尚である。又一時は日本唯一の一切經といはれし高麗本を保存せしは、京都の建仁寺即ち禪宗寺である。又之を謄寫せし者がある、其は妙心寺の禪僧である、道元禪師の如きも、入唐前、建仁寺に於て一切經を讀んだ御方である、禪宗と雖も、一切經から出て居るといふこと須らく是等の事實よりして想察するがよい。

今眞宗に就いて之を考ふるに、遠く印度に溯らずして、近き日本の内に於て之を語るに。親鸞上人の教は、法然上人から來て居る。法然上人の教は、源信和尚から來て居ることは、言

ふまでもないことである。即ち源信和尚は、永觀二年冬十一月より始めて、翌年の四月までに、六卷の『往生要集』を造られたのが、我が日本に淨土眞宗の興る源である。處がどうして此の『往生要集』が出來たのかといふに、これは源信和尚が、實母の誡めにより北、叡山の横川といふ所に隱れ、多年間に、一切經を五遍まで閲讀せられた結果として出來たものである。『正信偈』の中には、「源信廣開一代教」とあるのは此の譯である。

次に法然上人はどうであるかといふに、法然上人は美作國に生れた御方である。然るに九歳にして父に別れ、それが因緣となりて遂に出家し、十三のとき叡山に登り、功德院の皇圓阿闍梨に就いて、天台宗の學問をして居られた。處が死の問題につき、どうしても安心が出來ぬといふところよりして、皇圓阿闍梨の所を辭し、黑谷に隱遁し、報恩藏といへる經藏の中に入り、獨り一切經を繰返すこと五遍とある。先きの源信和尚と同しことだ。『正信偈』の中に「本師源空明佛教」とあるは此の譯である。

源信和尚は、十五歳にして母の嚴しき誡めを緣となし、叡山の横川に隱れて、一切經を五遍まで繰返し、四十三歳の時に至つて、彼の『往生要集』を造られた。今法然上人は、十八歳の時よりして父の遺言に感ずるところ深き餘り、叡山の黑谷に隱れて、一切經を五遍まで繰返し、四十三歳の時、始めて善導大師の「一心專念彌陀名號」の文に依り、他力信心を獲得せられたのである。何んと御兩人の履歷がよく似て居るでないか。

さて親鸞上人はどうかといふに、上人は高倉天皇の承安三

年四月朔日を以て、京都藤原氏の家に生れた御方である。不幸にして四歳のとき、已に父に別れ、八歳にして又母に離れ、身の不幸を逆緣となし、九歳の春を待つて、出家を遂げられた。爾來十年の間は、叡山の東塔、無動寺の大乘院といふのに寄宿し、天台宗の學侶としての御勉强であつた。

然るに十九歳の頃よりして、叡山に落着いて居られなんだ樣子である。如何に天台宗等の學問を致されても、精神上の大問題に就いて解決が出來ぬので、種々煩勞の餘り、諸方を徘徊せられたやうに見える。此の時、どれほどの時間であつたかは知らねども、奈良興福寺の經藏に入つて、例の如く一切經を讀まれた。幾回讀まれたものか、其れは傳記の中に見えて居ない。孰れにしても、親鸞上人も、源信和尚や、法然上人と同樣に、一切經を御讀みになつたこと丈は事實である。

されば、眞宗もまた、一切經の中より、搾り來り、練り上げた宗旨であることは、疑はれぬことになつて來た。そこで唯一切經と謂つたばかりでは、一切經といふは、どんなもので、どれほどあるものか、又どうして出來て、どういふ工合な經歷を以て、今日存在せるものかといふことが解らぬ。そこで此の事の、荒增しを知るは、僧となく、俗となく、必要の事と考へ、遂に之を記して、有志の人に頒賦することにしたのである。

大正四年三月日

# 凡例

一、本書は嘗て雜誌「人道講話」の中に掲げしも、匆匆の際、その記述よろしきを得ざるもの多きを發見し、此に之を增補訂正し、一は人道講話の會員に頒ち、又一は、予が嘗て住職せし三河國入覺寺に於ける、宗祖六百五十回忌、の紀念出版に擬せんとするにあり。

二、支那にありては、一切經よりも、藏經、又は大藏經の名を應用すること多く。我が日本にありては、古來一切經の名を運用すること多くして、藏經よりも、一切經の名は通俗的傾向を有す。題に「一切經」の名を用ひし所以此に存す。

三、本書、大藏經の歷史として、眞に其の大方を擧ぐるに過ぎず、詳細は余の敢て爲すところにあらざるのみならず、又目下その時間を許さゞるものあり、是れ特に讀者の賢察を請はんと欲するところなり。

# 目次

第一章　序論……一
第二章　印度に於ける藏經の成立及ひ起原……六
第三章　支那に於ける藏經の傳譯及ひ印刻……一一
一　支那佛教の特色（藏經の傳譯）……一一
二　漢字藏經の價値……一五
三　藏經の稱號ある所以……一八
四　藏經の部數卷數（附り入藏の規定）……二四
五　藏經印刻の由來（附り刻藏の系統）……三二
第四章　日本に於ける藏經の傳來及び印刻……四六
一　奈良朝以前に於ける藏經の傳來考……四六

二　平安朝以後に於ける藏經の傳來考……五二
(イ)入唐八家未だ藏經を傳へず……五二
(ロ)齎然大德始めて刻藏を請來す……五八
三　日本に於ける藏經の印刻史……六四
(イ)日本に於ける印刻術の起原……六四
(ロ)天海僧正の活字藏經成る……七〇
(ハ)鐵眼和尚の黃檗藏經成る……七五
(ニ)忍澂上人の藏經對校……八四
(ホ)丹山法師の藏經對校……八八
四　明治時代に於ける弘教書院及藏經書院の開設……九五
第五章　結論……一〇二

# 一切經の由來

文學博士　村上專精著

## 第一章　序論

「暗の夜に鳴かぬ烏の聲きけば生れぬさきの父ぞ戀しき」といへる古歌がある。思へば、今の世は無佛世界の暗の夜である。既に無佛世界の暗の夜なれば、固より佛說の聲のあるべき筈はない。然るに此の無佛世界にして、佛說の聲の無き時に生れながら、必ずしも佛說の聲を聞くことが出來ぬと極つた譯のものでない、時に聞くことが出來るのである。如何にして之を聞くことが出來るかといへば、一切經卽ち藏經の文

一切經は佛說の聲なり

字は皆悉く佛説の聲である。

試みに一切經を開いて見るがよい、御經の初めには必ず「如是我聞」の四字を冠らしてある。「如是我聞」とは、佛弟子の阿難か、是の如く我れは佛説の聲を聞けりと、自ら證明せられたのである。

經體論

そこで昔印度に經體論の起つたことがある。經體論とは、御經の本體何ぞやの問題を解決するのだ、此の問題につき種々異論ありと雖も、結局佛説の聲を以て御經の本體となすといふことになつて居る。『瑜伽師地論』『對法論』『唯識論』『述記』『義林章』等

肉の釋尊に遇ふことかなはず

されば今日の吾人が御經を拜讀するのは、暗の夜に鳴かぬ烏の聲を聽くのである。之を聞て見れば「生れぬさきの父ぞ戀しき」といへるが如く、暗路に迷ふ吾人を、導きたまへる父上の釋尊は、我が生れぬさきに早く涅槃の雲に隱れたまひしも。

心の釋尊に遇ふことを得

吾等は戀しくてならぬ。又遇ひたくてならぬ。しかし如何に戀しくても、今や何人も遇ふことはかなはぬのである。

しかしながら、肉の釋尊に遇ふことはかなはずとも、心の釋尊に遇ふことは出來る。心の釋尊とは、靈の釋尊である。靈の釋尊とは法の釋尊である。法の釋尊とは即ち一切經にして聲の釋尊である。

佛教廣しと雖も、要を取て之をいはゞ、佛法僧の三寶より外はない。聖德太子が十七憲法の中に「篤く三寶を敬へ」といはれしは、篤く佛教を敬へといふことである。舍人親王の『日本書紀』などは、三寶を以て佛教の代名詞の如くに使用してあるのは此の譯である。即ち博き佛教を、佛寶と、法寶と、僧寶との三部に分けて、之を三寶と稱するのである。

法寶とは藏經なり

然り而して謂ふ所の法寶とは、何者なりやと問へば、藏經これなりと答へねばならぬ。即ち佛所說の教法を概して法寶といふ、而して藏經は佛所說の教法を書き遺したものであるから、藏經全部が即ち法寶である。

藏經は三寶全體に通ず

然るに更に進んで之を考ふるに、藏經は啻に三寶中の一法寶たるのみならず、三寶全體に關係を有し、佛教全部を網羅すと謂つてよい。若し人あり、佛とは如何なるものなりやの疑問を發し、之を研究せんとする者は、宜しく藏經に依るべし、然らざれば、佛の何たるを知ること能はず。更に又人あり、僧の何者たるやを知らんと欲し、之を研究せんとする者あらば、宜しく又藏經に依るべし、然らざれば僧の何たるを知る能はず。是の故に、一切經は三寶中の法寶にして、而も又佛法僧の三寶全體に關係を有すといはねばならぬ。語を換へて之をいはば、藏經を離れて佛教あることなしと謂つてよい。

藏經を離れて佛法なし

かくの如く貴き藏經は、如何にして出來、又如何にして傳はりしものか。是れ頗る重要の問題にして、而も之を委しくすることは、眞に不容易の業である。時をいへば、三千年に及ばんとするほど長い間に於て、南方佛教には南方佛教の藏經あり、北方佛教には北方佛教の藏經あり。更に進んで其の南方佛教の中にあつて、其の處を異にし、又其の文字を別にすれば、隨つて、又特殊の藏經の出來るは、自然の數である。即ち支那を中心となす所の北方佛教の中にあつても、漢字藏經の外に、滿字藏經あり、蒙古藏經あり、西藏藏經ありといふ如く、種々に相分れ、又一の漢字藏經の中にあつても、宋版、元版、明版、麗本等、

藏經の種類

一切經の由來

又實に數十種の別あつて、之を委しくせんことは、實に不容易の業である。然りと雖も今や門外諸氏のため、我が日本に於ける藏經、即ち一切經の由來を畧説することにした。

## 第二章　印度に於ける藏經の成立及び起原

藏經と稱し或は一切經と稱し又は一代經といふ固より別物にあらず、共に佛説である。されば其の起原は、印度にあるや、素より無論である。

釋尊の出世

嘗て印度の迦毘羅衞城に降誕し、天上天下唯我獨尊と、自ら唱へられし悉達太子は、人の生老病死、縮めて之をいへば、人生の無常に深く感ずる所あつて、二十九歳に出家し、三十五歳にして成等正覺し、四十五年の其の間は、時間と相手とのあらん限りは、常に法を説て止まざりしが、七十九歳の其の時は、終に自ら嘗て厭はれし無常の風に誘はれ、五印度中あらゆる階級の人人が、皆擧つて、恰も慈母に分るゝが如く、別れを惜む其の中に、終に寂滅涅槃の雲に隱れたまへり。大衆悲歎の聲は、天地を震動せんとし、殆んど狂せんばかりの狀況であつた。此の時に當つて、大聖釋尊は、左の如き説諭を加へられた。

釋尊最後の教訓

汝及餘衆生、今於我何求、汝等所應得、我已爲説竟、
何用我此身、妙法身長存。

又曰く

佛身之存亡、此法常無盡。

又曰く

當入於涅槃、汝等當依法。

是ぞ釋尊最後の說敎であつた。肉の我れは今滅すと雖も、法の我れは盡未來際滅するものでない。肉の我れは假令今後世に存すとも無用のものであるが、法の我れは實に有用のものである。汝等は是より法の我れに從へ、暫時も法の我れに離るゝ勿れ」とは、實に釋尊最後の敎訓であつた。所謂法の

藏經の本體

我れこそ、實に藏經の本體である。

藏經の起原

釋尊の此の精神を得たる者は、幾多の弟子中、獨り迦葉であつた。即ち他の弟子輩は、釋尊の入滅を見て、悲歎の淵に沈み、何等の爲すことも知らなんだ。偶奔走せるものは遺骸を荼毘し奉る葬式の事であつた。然るに迦葉一人は、他の事に關せず、唯偏へに、御在世の時、弟子等が聽聞せし御敎を、何とかして之を後に傳へる手段を取らねばならぬと、此の事唯一心にのみ奔走せし結果、遂に摩竭陀國の阿闍世王に、此の事を說き、阿闍世王保護の下に於て、阿難を初めとなし、五百名の弟子等を、王舍城附近の畢波羅窟といへる處に集め來つて、此に大會議を開き、以て釋尊在世の說敎を結集した。これぞ實に世に藏經あるの起原である。全世界に今や幾多の藏經あるも、皆是より分れ出でざるものはないのである。

しかしながら、此の時に於て、現存の五千卷、又は七千卷、或は八千卷と稱するが如き、多數の經卷が皆出來たといふのではない。又此の時已に、文字を以て記載せられたといふのでもない。愈々文字を以て記さるゝことになつたのは、餘程後のことである。

暫く印度の上に就きて之を見るも、今の藏經なるものは、一

印度に於ける藏經一千有餘年を以て成る

千有餘年の間に於て漸く成れるものである。藏經は經律論の三部に分れて居るが、其の中の藏經は、皆悉く佛滅の時に結集せられしものと暫く假定しても、律藏及び論藏の二部は、殆んど其の全部が、佛滅後多年の間に於て、漸く成れるものである。即ち五部の律藏は、優婆毱多の門下五人之を作り。『發智論』は迦多衍尼子之を作り。『婆娑論』は五百の羅漢之を作り。大乘の諸論は、馬鳴、龍樹、無着、世親等の諸師あつて之を作つたものである。決して一時に出來たものでないといふ事、此に於て知るべきである。

四回の結集

さて之を文字に寫すことになつたのも餘程後のことである。結集といふことも、一度ではない、數回あつたものと見える。四回あつたことは既に史上明白になつて居る。即ち第一回迦葉の結集。第二回耶舍の結集。第三回阿育王の結集。第四回迦膩色迦王の結集これなり。是の如く四回の結集の、四回あつた中に於て、第四回の時には、既に文章として之を綴り、以て後世に之を遺すことになつたことが『西域記』等の中に記載してある。されど、其の前の事は皆明かでない。

# 第三章　支那に於る藏經の傳譯及び印刻

## 一、支那佛教の特色（藏經の傳譯）

支那佛教の特色

支那佛教史の持色となすべきものは、何であらう。禪宗の盛に開けしは、支那佛教史特色の一である。又天台宗、華嚴宗の如き宗旨が起つて、高妙の理論を戰はし、以て相互に理論の高尚圓妙を弄び、以て之を得意となす傾きあるのも、支那佛教

特色の一である。

支那佛教發展の基礎

しかしながら、是れよりも、支那佛教特色の第一に位すべきものは、飜譯事業である。三藏經の飜譯は、實に支那佛教發展の基礎を爲して居る。此は印度に其の例なく、日本に其の例なし、餘他の國には全く其の例なきにあらざるも、支那の國ほど、其の切要を認めなかつたに相違ない。獨り支那は、言語、文字、地理の三點より考察するに、特に其の切要を認むると共に、又其の困難を感じた。道安が「五失三不易」を論じ、玄奘が「五種不飜」を立するが如きは實に其の困難の狀況見るべきである。

『宋高僧傳』譯經篇、之を論す、見るべし

至元法寶勘計總錄の統

然るに其の困難を忍び、飜譯事業をよく遂行せしものは支那の國である。暫く『至元法寶勘同總錄』の統計に據るに藏經の飜譯は後漢の明帝永平十年（西紀六十七年）に始まつて、元の至元二十二年（西紀一千三百六十年）に至るまで、即ち約一千三百年間に、一百九十四人の飜譯者あつて、一千四百四十部、五千五百八十六卷を譯したことになつて居る。之を經律論の三藏に分てば左の如くである。

經藏　八百九十七部、二千九百八十卷、
一、大乘經
二、小乘經

律藏　二百九十一部、七百十卷、
二、大乘律、
二、小乘律、

論藏　二十八部、五十六卷、
六十九部、五百四卷、

一、大乘論、　一百一十七部、六百二十八卷、
二、小乘論、　三十八部、七百八卷、
△此外に、傳記及び編輯類、九十三部二百八十二卷あり、之を加へて、合計一千五百三十三部五千八百六十八卷となれり。



貞元錄の統計

然るに『至元法寶勘同總錄』の如きは、各目錄中比較的に統計の少數な方である『貞元錄』の如きは、實に左の如く多數の統計になつて居る。

自後漢明帝永平十年、至大唐德宗貞元十六年、凡七百三十四載、中間傳譯、緇素總一百八十七人、所出大小二乘三藏聖教、及賢聖集傳、並失譯、總二千一百四十七部七千三百九十九卷。是に由て此を觀るに、後漢の明帝以後七百三十四年間に、二千一百四十七部、七千三百九十九卷の飜譯あつたことになつて居る。是の如く其の目錄に依つて統計の相違あるは、孰れも正確のものと致し難い證據である。しかしながら、吾人はこれに依つて、古人が幾多の艱難辛苦に恐れず、多年間の繼續事業として、續々之を遂行せし一般を想察するに餘あり、と謂つてよいと思ふ。

## 二、漢字藏經の價値

吾輩は未だ滿字藏經を知らず。蒙古藏經を知らず。又西藏藏經を讀まず。其の他暹羅錫蘭等の藏經があつても、未だ之を讀まざるのみならず、將來と雖も、進んで之を讀むべき眼を持つて居ない不具者である。

然りと雖も、余は獨斷的に、世界萬國中、幾多の藏經ありとするも、漢字藏經に勝るものなしといふことを、自ら信じて疑は

ぬものである。千有餘年間、此の飜譯事業を繼續した國は、他に恐らくあるまい。隨つて漢字藏經ほど、多數の經律論を集めたのもあるまい。佛典の飜譯事業の最盛んなりしは各國中支那を以て第一等國とせねばなるまい。これと共に漢字藏經を以て、世界第一の藏經と謂つて然るべきものと思ふ。

漢字藏經は世界第一

所謂滿字藏經にあれ、將た、蒙古藏經にあれ、また西藏藏經にあれ、皆此の漢字藏經が本となつて、出來たものである。之を要するに、漢字藏經は、ヒマラヤ山以東の大陸地方全部に、佛陀の福音の普及せる基礎となれるものにして、其の効果實に無限絶對である。唯獨り佛教傳播の基礎となれるのみならず、文明の最古國たる印度思想を、ヒマラヤ以東の大陸地方に傳播せし、効果の著しきものあつたに相違ない。

漢字藏經の効果

日本佛教徒の被むれる漢字藏經の恩澤

さて吾等日本人としては、殊に此の漢字藏經の恩澤の偉大なるを思ひ、其の之を遂行せし幾多の、高僧諸師に對し、感謝する所がなくてならぬ。若し夫れ此の漢字藏經なるものが、彼の支那國に於て成るにあらざれば、印度の佛教を、我が日本に迎へることは到底望むべからずである。支那は、日本に比するに、一は大國なると、又地理の接續せるとの事情あつて、幾度國の革命に逢ても、飜譯事業を繼續することが出來た。然るに日本の國にあつて、當時この業を起し、而も之を繼續すといふことは、眞に不可能であつたに違ひない。

されば日本人として、特に漢字藏經の恩澤を思ふと共に、其の飜譯者の勞を忘るべからずである。乃ち左の詩をよく記憶するがよい。

晉宋齊梁唐代間　高僧求法離長安
去人成百歸無十　後者安知前者難
路遠碧天唯冷結　沙河遮日力疲殫
後賢如未諳斯旨　往々將經容易看

彼の旅順港や、臺灣の地が、何故今や日本の所領地となれるやといへば、嘗て幾萬の兵士が、身を戰場に曝し棄てた、御蔭であると謂つてよい。もと印度文字で出來た藏經が、如何にして支那國に來たり、漢字の藏經になれりやといふに、幾多の三藏諸師が、身を或は原野に曝らし、或は虎狼の食となるも、敢て恐れざりし御蔭である。而して前の詩は、よく此の意味を顯はしてゐる。





## 三、藏經の稱號ある所以



藏經とは佛說の叢書である。古來これを呼んで藏經と稱し。或は大藏經と呼び。又は一切經と號することになつて居る。時に何故、佛說の叢書を呼ぶに、藏經又は大藏經の名を以てすることになりしやといふに。これは佛入滅の時に、迦葉が結集せしものを經律論の三部に分つて、之を三藏と謂つたのである。故に此の結集の顚末を書いたものを、一に『迦葉結經』と題し、又一に『撰集三藏及雜藏傳』と題してある。爾來三寶を以て佛教の代名詞に應用せし如く、三藏といへば、即ち佛說を呼ふの稱號となつたのである。



吾輩が嘗て藏經とは三藏經の略稱だといへるを、有人注意して、藏經とは藏庫の經律論といへる意味にして、所謂三藏の意味でないと謂はれしも、吾輩は其の意を得ない。既に支那

に之を飜譯し、漸く卷數を增加し、一大叢書とならんとするや。唐の太宗、高宗の兩皇帝、及び則天皇后。又宋の太宗、眞宗の兩皇帝、及び明の太宗皇帝等、前後相繼て藏經の序跋を書かれた。而して今其の序跋を見るに、皆三藏聖教序と題してある。唯、明の太宗のみ藏經讚と題せられた。是に由て此を觀るに藏經とは三藏經の略稱なること、古來已に一定して居ると謂つてよい。

一切經といへる名の始まり

藏經とは三藏經の略稱にして、佛說の經律論を呼ぶの稱號なりとすれば、後漢以來、梵書の飜譯の成るに隨ひて、已に藏經の名を應用して居たに相違ない。しかし之を大藏經と稱し、又一切經といふことになつたのは、何れの時代なりしや、こは不明瞭である。『佛祖統紀』三十卷に、北周武帝保定三年日本欽明天皇二十四年の詔が出してある、左に揭げておかう。

保定三年詔曰、歲在昭陽、龍集天井、當令所司、奉造一切經藏、始于生滅之敎、訖于泥洹之說云々。

是に由て此を觀るに、一切經の稱號は、六朝時代にあつて、已に行はれて居つたことは、誠に以て明白である。唐の初めに、玄應が藏經の音義を書いて『一切經音義』と題したのも、其の前に已に此の稱號があつたからのことである。

一切經の名は多く日本に流行す

しかし支那にあつては、一切經の稱號よりも、藏經又は大藏經といふ名の方が、多く用ひられた。一切經の名は支那よりも我が日本に來つて多く用ひられて居る。鷲尾順敬氏が、大藏經の名は鎌倉時代以後の流行のやうに見ゆると謂はれた、或はさうかも知れぬ。

進んで大藏經の名は、いつ頃に始まりしか、これも不明瞭である。しかし梁武帝の頃、既に大藏經の稱號のあつたことは、傅大士が輪藏を製作するに就いての願文に依て想察すべきである。由て左に其の願文を擧ぐることにした。

大藏經の稱號の始まり

梁傅大士、愍世人多故不暇誦經、及不識字、乃於雙林道場、創轉輪藏、以奉經卷、其誓曰、有三登吾藏門者、生生不失人身、有能信心、推之一匝、則與誦經、其功正等、有能旋轉不計數者、所獲功德、即與讀誦一大藏經、正等無異(下畧)『佛祖統紀』三十四

是に由て此を觀るに、梁朝の頃、已に大藏經の稱號が行はれて居たと見える。大藏經とは、唯是れ藏經を形容するに、大の字を冠せたばかりのものなれば、藏經の名と共に、早い頃から、已に行はれて居たかも知れない。之を要するに吾輩大藏經



又は一切經などの稱號は早くて唐朝以後の事のやうに、想ふて居た。處が一往之を尋ぬるに、六朝の時已に此の稱號ありしこと、殆んと疑はれぬことになつて來た。

因みに輪藏の事を一言して置かう、輪藏は日本の名山大刹の經藏には、大概備へてある器械である、早くいへば、運轉することの出來る輪形の書棚である。これは前文の如く梁朝時代の傅大士の發明であるが、此の傅大士は當時寶誌といふ人と相竝んで、頗る異風の人であつた。其の異風の所は、左の二十八字を以て、想察すべきである。

道冠儒履釋袈裟　和會三家作一家
忘却率陀天上路　雙林痴座待龍華

『佛祖統紀』第二十三卷に、畧傳が出してある、今は其の畧傳よ

傳大士輪藏製作の三願

りも、先きに擧げたる輪藏製作に就ての願文の意を述べて置かうと思ふ。即ち傳大士は、輪藏を作るにつき三願を發した、其の三願の意は左の通りである。

尊き御經があつても、或は塵事多忙のため、或は之を讀む文字の眼なきにより、終に之を讀むこと能はざる者あり、此の者のために輪藏を造つたのである。仍て若し人あり、三度此の經藏に登れる者は、生生世世人間に生れしめん一是。唯經藏に登るのみならず、熱き信者を以て之を推し、一回周匝する者は誦經と同等の功德を得せしめん二是。唯一度のみならず、幾度となく之を旋轉して止まざる者は、大藏經全部を讀むの功德と等しからしめん三是。

## 四、藏經の部數及び卷數附り入藏の規定

藏經の卷數の一定せざる所以

前述の如く、漢字藏經は、一千三百年の長日月を要して、漸く成れるものである。其の最も多く飜譯せられしは、初唐以前六七百年の間であつた。何れにしても藏經は一時に出來たものでない、眞に漸を以て成れるものである。而して藏經及び大藏經の名は、早き頃より已に行はれて居たものとすれば、藏經の部數卷數は、時により一定せざるや、推して知るべきである。

しかのみならず、支那選述のものと雖も、其の著作の如何により之を藏經の中に加ふることが無いとも限らない。時によれば、支那選述の中よりして、傑作のものは、衆議の上勅令を以て之を入藏せしむることになつて居たのであるから、藏經の部數卷數は時により一定せざりしこと、推して知るべきで

ある。既に藏經の目錄を悉く尋ぬるに、六七十部の多きに達して居る、隨つて其の部數卷數の一定せざること亦以て思ひ知るべきである。

智昇の藏經校定

處か晉の道安以後、六朝を經て、唐朝に至るまでの間に於て、經錄を編む者頗る多しと雖も、比較的に精密の調査を爲し、以て之を大成せし者は、唐の智昇である。即ち贊寧は『高僧傳』の中に左の如くこれを記して居る。

釋智昇(中略)開元十八年歲次庚午、撰開元釋教錄二十卷、最爲精要、何耶、諸師於同本異本舊目新名、多惑其文、眞僞相亂、或一經爲兩本、或支品作別翻、一一裁量、少無過者、如其舊錄江泌女子誦出經、黜而不留、可謂藻鑑、杜塞妖僞之源、有茲獨斷、後之圓照貞元錄也、文體意宗、相距不知幾百里哉、麟德中、道宜出內典錄十卷、靖邁出圖紀四卷、昇各續一卷、經法之譜、無出昇之右矣、

藏經の卷數は一定し難し

之を要するに、智昇の『開元錄』成つて、此に藏經の數は五千零四十八卷といふことに、一時は決定したのである。然るに此の數は決して永久不動のものでない。爾來幾度となく變更し來り、今に一定の數あることなしといふてよい。通俗に藏經は五千卷なりと謂ひ、或は七千卷なりと謂ひ、或は八千卷なりと呼び來れるも、無理ならぬことである。先に參考のため、玄智の『考信錄』に引用せられし宗濂の『護法錄』の說を擧て置かう。

護法錄四十五　毘盧閣碑文云、我聞法藏總爲五千四十八卷、以別計之、凡六百億三萬一千八百八十字之多也。又六十四寶積三昧集序云、以卷計者、梁則五千四百也、隋則六千一百九十八也、

唐開元則五千四十八也。至貞元則又增一百七十五。宋又增七百七十五。元又增二百八十六。今以千字文紀之、自天至遵爲號者、五百八十六、通爲六千二百二十九卷。以上玄智語を加へて曰く、宋藏目錄云、千四百五十三部六千三百二十三卷六百六十五函。明藏目錄云六百七十七函六千七百七十一卷。

藏經の字數まで數へ來つて、『開元錄』の卷數なれば、六百億三萬一千八百八十字の多きに達すといへる、細密の調査に至つては唯感心するといふより外はない。

支那撰述の入藏

時に支那撰述の書にして、之を藏經の中に編入すといふことは、不容易の事になつて居たのである。例せば隋朝の智者大師に依つて成れる、天台の三大部の如き名著も、入藏の許可を得たのは、宋、仁宗皇帝の天聖二年である。即ち智者大師滅後、四百二十七年を經て、漸く大藏經の中に加へられることになつたのである。又唐初の道宣律師に依つて成れる、律の三大部の如きも、入藏の許可を得たのは、宋、理宗皇帝の淳和五年である。即ち道宣律師、滅後五百七十九年を經てから、漸く藏經中のものになつたのである。入藏許可の容易にあらざりしこと誠に以て思ひやらるゝでないか。

藏經は佛說の叢書

元來藏經といふ名稱は、前に云ふ如く三藏經の略稱にして、謂はゞ佛說の叢書である。されば容易に支那撰述のものを入れざりしは、至極尤なことにして、敢て疑ふべき筈はないのである。但佛說を中心にして、音義、目錄の如き、之を披閱するに就き、便利を與へるもののみを選んで、之に加へしものが藏

經である。

入藏禁止の詔勅

かういふ譯であるから、假令梵書の飜譯といへども、必ずしも入藏を許すといふ譯のものでなかつた。即ち宋、眞宗皇帝の時に『頻那夜迦經』といふものが飜譯せられしも、遂に之を入藏することを許されなんだ、其の詔勅文は、實に左の通りである。

元亨釋書の先例

金仙垂教、實利含生、貝葉膽文、當資傳譯、苟師承之或異、必邪正以相參、既失精詳、寢成訛謬、而況葷血之祀、甚瀆眞乘、厭詛之辭、尤乖於妙理、其新譯頻那夜迦經四卷、不許入藏」

是に由て此を觀るに、支那に於て藏經の撰定は、實に不容易にして、又著書の眞價は入藏に依つて定まる形をなして居たのである。我が日本でもさうだ。嘗て虛關が『元亨釋書』を作るや、自ら上表文を製作して入藏を願つたので、眞永三年これを許し、遂に開板の運びに至つたものと見える。（後に至つて之を辯ずべし）、

弘敎書院の先例

又明治の初年に、弘敎書院を開き、今の所謂縮刷藏經を刊行する時に當り、日本撰述部として、支那撰述の外に、又重ねて日本各宗の祖師の撰述に係はるものを加へたいとて、日本撰述八十部六十五卷を加ふるにつきても、弘敎書院よりして、各宗本山に紹介し、それ〳〵本宗の指揮を得て、之を加へたものである。然るに近頃京都帝國大學藏書なる名義の下に、同文科大學長、松本文三郎君を會長に戴き、大日本藏經を刊行せんとするものがある。吾輩これを評して藏經の神聖を穢すと謂つた所は、此の譯であるそれとも續藏經といふのなら、差支あるまい。

黃奈赤軸の誤傳を正す

時に古來黃卷赤軸と稱へ經卷はその表紙を赤色となし黃紙を用うるのが慣例となつて居る。それは後漢明帝の時初めて佛敎渡來し、時の道敎と功德の優劣を試みんとて、長安の白馬寺に檀を築き、佛敎と道敎との藏經を檀上に積みて、之に火をつけしに、道敎の方は燒失し、佛敎の方は燒失せなんだ

ので、其の故事を慕ひ、黄卷赤軸に作つたものと謂つて居るが、それは全く俗説である。吾輩もこの俗説に迷つて居たが、今やその迷は覺めた。黄紙を用ふることになつたのは、全く蟲蠹の憂を避けんがためである。即ち智圓の『維摩經略疏垂裕記』一九丁に左の如く謂つてある。

唐貞觀中、始用黄紙、寫刺制、至高宗上元二年詔曰、詔刺施行既爲永式、比用白紙、多用蟲蠹、今後尚書省、頒布天下、并宜用黄紙、

## 五、藏經印刻の由來 附り刻藏の系統

印板の起原濫觴

獨り支那に限らず何れの國と雖も書籍を印板に附することになりしは、何れの時代なりや、是れ考古學上、一の問題である。今支那にあつて之を尋ぬるに隋朝の時、已に印板業の起れるありといふ説がある、蓋し其説の由つて來る本は、費長房の『歴代三寶記』である。『歴代三寶記』の中に、左の文あるを見て、

隋朝印刻を認むる説

此の説を立するに至つたのだ。

開皇十三年十二月八日、隋皇帝、佛弟子姓名敬白(中略)屬周代亂、常侮蔑聖跡、塔寺毀廢、經像淪亡、無隔華夷、掃地悉盡、使愚者無以導悟迷、智者無以尋靈聖、弟子往籍三寶因緣、今膺千年昌運、作民父母、恩拯黎元、重顯尊容、再崇神化、頽基毀跡、更事莊嚴、廢像遺經、悉令雕撰、第十三卷

此の中に、既に明かに「悉令雕撰」と謂つてある。されば隋文帝が、發企して、印板業を起したに相違ないといふのが一説である。

隋朝印刻を否定する説

然るに他の一説は、大に之を否定し、かくの如きは未だ文を讀むことをよくせざるが致すところである。前句に「廢像遺經」とあつて、後句に「悉令雕撰」といへるものなれば、雕は廢像の

二字を承け、撰は遺經の二字を承けたものである。即ち雕廢像撰遺經の意にして、印板雕刻の證據にはなりがたしとして、前說を駁し、唐朝時代と雖も、未だ印本の傳はるものあるを見ず、隨つて隋朝時代に印刻なきは、もとより無論といふのである。吾輩を以て之を謂はしむれば、孰れも極端と極端との衝突であると謂ひたい所である。

兩說の批評

前說の如く見れば、隋朝の時、已に藏經が殘らず印刻せられたことになるでないか、そはいかにも極端である。若し隋朝時代に印刻せられし藏經があるとすれば、唐の時に來つては益々多く出來て居なければならぬ筈である。然るに唐刻の藏經は未た吾輩の見聞に寫らない。されど又後說の如く、隋唐の頃は未だ全く印板業が起らなんだともいはれまい。既に法帖といふものが遺つて居る、六朝の頃盛んに碑文雕刻の術が行はれたことは確實である。是れ即ち單行本の一冊や二冊は、たしかに出來てあつたことを證明するに足る有力の材料ではあるまいか。假令六朝の時は未だ之なきも、唐朝の盛運に至れば、隨分澤山に出來て居たであらう。されど支那は日本と違ひ、時々の革命あり、又政府よりして極端なる廢佛があつたから、日本のやうに、之を永久に保存することが出來なんだので、唐代の印刻物を今日に傳へぬのではあるまいか。」

宋太祖破天荒の大事業

時運の既に此に至れるものあつたから、宋、太祖、天下を統一するや、大英斷を以て全藏印行の大業を發企せしものに相違ない。左なくば縱ひ宋、太祖の力を以てするも突如として、此の大業を企つることが出來るものでない。宋、太祖の天下統一

は、恰も隋、文帝の天下統一と相似て居る。隋、文帝は北周武帝廢佛の後に興つて、佛教恢復のために致せし効力は、頗る偉大であるが。宋、太祖は唐末五代の隨一たる周世宗廢佛の後を繼で興り、又大に佛教恢復のために盡瘁せし人である。其の効力は、隋、文帝よりも遙に勝つて居る。但し宋、太祖破天荒の大事業として見るべきものは、實に大藏經の印行である。これは歷史あらん限り、抹殺すべからざる大事業であつた。

太宗の譯經院と太祖の刻藏との比較

宋、太宗の人物は太祖よりも優に勝つて居た。彼れは太祖よりも修正的人物であつた。『太平御覽』といふ書物は、宋の李昉等、勅を奉じて之を作れるものにして、一千卷ある。然るに太宗、日に三卷づゝ覽て、一年間に讀了したといふほどの人物であるから、凡庸の人でなかつたに相違ない。此の太宗の佛教に對する大事業は譯經院であつた。太宗が特に譯經院を開き、一百五十名の留學生を印度に送り、唐太宗の時の盛運を繰返す考であつた。其の壯擧實に賞するに餘りありと雖も、結果を以て之を論ずるに、餘り好成績でなかつた。飜譯事業に就ては、太宗の盛運を繰返すことは出來なかつた。然るに太祖の藏經刊行は、空前の大事業にして、而も萬世不滅の好成績を擧げたと謂はねばならぬ。

宋太宗の譯經院

即ち太祖勅して、蜀の成都に於て大藏經全部の印板を彫刻せしめ、之を刊行せしむること、實に十三萬の多きに達したのである、何と大成功ではあるまいか。宋太祖一度この先驅を試みるや、爾來大陸地方に一時の勢力を占むる覇王は、王者としての一種附滯事業の如く、看做され、藏經の印刻を爲すもの

宋太祖の大成功

陸續として起つて來たのである。思ふに此の事たるや、唯獨り佛教弘通のためのみならず、亦以て世の文運全體の進歩を助けたことは、實に非常なものであつたに相違ない。

然しながら未だ此の事につき委しき調査をしたものはない。獨り餘の友人常盤大定君あつて、之を委しくせられた。常盤大定君が、年を重ねての研究の結果は、嘗て『哲學會雜誌』を以て世に之を公にし。後又『新佛教』第十五卷第十二號の中に其の表を作り、且つ簡軍なる説明を附し。世に公にせられた。いま同氏の許諾を得て、左に之を抄出をることにした。

常盤大定君藏經の印刷史を調査す

（前略）さて刻藏の最初は北宋の初期の官板蜀本と傳へらる。それ以前にも私刻のものがあつたらしいけれども、現今にては之が成否を斷言することが出來ぬ。この蜀本の成功は頗る當時の佛教國に影響した。其翌年我邦の東大寺齊然が、直に入宋して之を請來した機敏と熱心とは驚くべきである。七年後に高麗にも請來せられ、二十餘年の後、契丹にも三十餘年の後西夏に請來せられた。嘗に請來せられたのみではない。その影響によりて本國支那には二個の福州本と二個の思溪本とを成立せしめ、外國にては、契丹と高麗とに各々官板の大藏あらしめた。當時南方の強たる宋と、北方の強たる契丹との間には、武に於てのみならず、文に於ても、非常の競爭あり、互に自國の書籍を他に出さしめなかつた程であるから、蜀本の成立が、契丹をしてそれ以上の大藏たらしめんと發願せしめたのである。宋と契丹とに大藏あるや、高麗にもまた同しく朝廷によりて刻藏の擧を成した。斯く、殆んど時を同じくして本國にも契丹にも、高麗にも、官私の各藏あらしめた動機は、素より大法尊信の意味が根柢を爲して居るけれど、其外に國家間の競爭と宗派間の競爭があつたに相違ない。高麗にては、一たび國家の富を傾けて刻藏したが、その後契丹の兵火に罹り燒失したので、更にまた國家の富を傾けて之を再雕した。此時は、蜀本と丹本と國本との三種を、丁重に比較

對校したから、空前の良本を得た。これが有名なる麗本である。我邦足利時代に於て完成はせなんだが刻藏の企てがあつて、相當に實行せられた。然るに麗本の渡來を見るや、切りに之を請來して、彼に再印せしむるまでに及んだ。我邦に現存するものは皆再雕麗本である。

蜀本中に含まるる佛典の數は、五〇四八卷で、これ唐の智昇の『開元釋敎目錄』に於て、整頓せしめた所のものである。この五〇四八卷は、各國の各大藏の根幹を爲し、その後に增加せられたものの多少及び種類によりて各種の大藏を爲すのである。以つて、蜀本の刻藏史上に於ける位置を知るべく、隨つて『開元目錄』の功績を知るべきである。さて本國に於て蜀本の直系といふべきは南宋の思溪本で、更に思溪本のまゝを覆刻し、これに『宗鏡錄』を加へたものは、元本である。而して大體は思溪本を襲ひ、元本を參酌し、更にその後の新譯新著を加へたものは日本の天海本である。されば、思溪、元、天海の三本は、一圖を爲し、宋本系統といふべきものである。

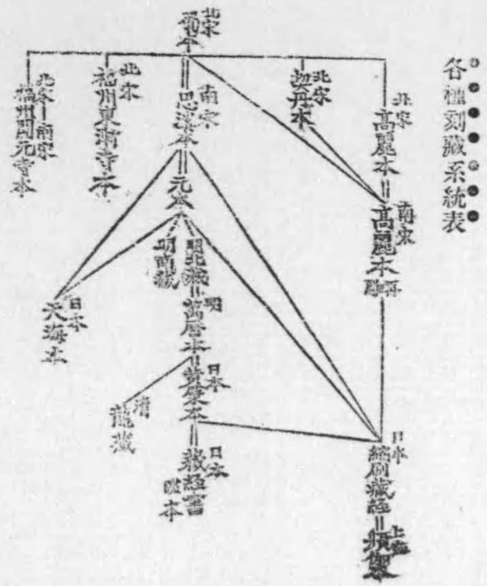
元末の大亂に於て、天下の大藏は悉く失はるゝまでの慘狀を呈した。その後を受けた明朝に於て非常の苦心によりて、南藏を勅造したが、誤脫多くて、如何ともしがたく、間もなくまた北藏を勅造した。苦心は察すべきであるが、如何せん、良好なる底本なかりしが爲北藏も亦誤脫が多いのである。

然し支那の學者は、廣く朝鮮や日本に求むることをせぬから、これ以上のものをを成し得べしとは思はなんだ。これに、中國といふ信念の餘弊であらう。北藏の根幹は、同じく五〇四八卷であるけれど、そのまゝではなく、幾分變更してあるから、嚴重の意味よりせば、宋本系統は元本に至りて終り、明代以後のものは、別系統に屬すといふべきである。南北兩藏板は官府に收められて、容易に得難いので、密藏禪師なるもの、萬曆年間に、二十年以上の星霜を費し、一世の心血を濺いで北藏そのまゝを冊子本に改刻した。これが通常明本と呼ばるゝもので、冊子本の藏經はこゝに始まる。我が黃檗山の鐵眼禪師は、此萬曆本を、そのまゝに覆刻した。鐵眼の苦心は、恰も密藏と同一轍で、而してまた大藏を天下に普及せしめた功勞も同一轍である、北藏には誤脫が多く、明本も、この缺點をその儘に受け嗣いで居るけれども之

を普及せしめた功勞に至りては、決すべからざるものがある。我邦至る所の名山大刹に寶藏せらるゝ大藏は、概ね槀本である。藏經書院本は、麗本に對校した槀本を底本としたもので、淸の龍藏は、明本を基礎とし、これに新著を增加したものである。以上の明、槀、龍藏經書院の四本は、明本系統に屬する。中に含まるゝ佛典の卷數は、別表によりて御承知ありたい。

日本の縮刷藏經は、空前の良藏たる麗本を底本とし、加之、南宋、元、明の三本を對校して、これを冠頭に載せてあるから、多少の誤植があるにせよ、最も學術的の良藏といふべきである。これが我邦に成つたのは、我邦學者の公平なる態度の然らしむる所、若し地を異にして、明の官板が、よし我縮藏に及ばずとするも、少くも麗本の存在を認めて居たら、佛敎學界に對する鴻益如何であつたらうと思ふ。上海某氏が最近刻藏の發願あるや、中國の信念を棄て、廣く學者に諮つたので、遂に我縮藏をそのまゝに覆刻することとした。これが頻伽本である。斯くて、我が刻藏は從來全く支那に範を仰いたが、明治時代に至りて、初めて我より彼に影響を及ぼしたのである。されば、縮藏と頻伽本とは、麗本系統に屬す（中略）以上十七種の刻藏を、系統上より申し上げた。系統とは中に含まるゝ佛典配列の順序よりいふのである。その順序や、卷數は、別表に揭ぐる通りである。是等十七種の刻藏の中、到底その零本斷片をすぐ見ることの出來ないのは、僅に蜀本と丹本と、初雕麗本と、明南藏のみで、他は悉く本邦に現存する。こはよし內亂があつても、天下悉く蹂躙せられたことのない爲換言すれば、皇統連綿の御蔭である。本邦にないものは、支邦にも朝鮮にも、之を得るの望みがない。最後に、是等十七種の刻藏の成つた時代、土地、發願者、部數、卷數等は、申上ぐる暇がないから、悉く最後に表出することゝした。

各種刻藏系統表




各種刻藏卷數比較圖

| | |
|---|---|
| 清龍藏 | 七二四五 |
| 藏經書院本 | 六九九二 |
| 黃檗本 | 六九四六 |
| 萬曆本 | 六九二四 |
| 明北藏 | 六三六一 |
| 明南藏 | 六三六八 |
| 頻伽本 | 八四八八? |
| 縮刷本 | 八五三四 |
| 再雕高麗本 | 六五五七 |
| 初雕高麗本 | 五九二四 |
| 天海本 | 六三二三 |
| 元本 | 六〇一〇 |
| 思溪本 | 五九一八 |
| 福州開元寺本 | 六一一七? |
| 福州東漸寺本 | 六四三四? |
| 契丹本 | 六〇〇〇? |
| 蜀本 | 五〇四八 |



常盤大定君は大藏經彫印考てふ題目の下たに於て、大陸地方に於ける藏經印刻の史的系統を調査せられた。同君が古來專門家の措て問はざるところ、また一向に注意する者なき藏經印刻の歷史を、支那の內地に向つて研鑽を遂げられしことは、學界上多とすべき壯擧である。同君はこれがため二年以上の歲月を費せりといふ。されば、吾輩一朝に之を思ひ立ち數日の間に之を完結せんとするものゝ、到底企て及ぶ所でない。故に大陸地方に於ける藏經印刻考のことは、すべて常盤大定君の考證に讓ることにした。幸に同君は哲學會雜誌の論文を修正し、不日別刊せらるゝことになつて居るから、有志諸君は之を見られた方が確である。

# 第四章　日本に於ける藏經の傳來及び印刻

## 一、奈良朝以前に於ける藏經の傳來考

我が日本國に、初めて藏經の傳來せしは何れの時代なりしや、是れ又日本佛教史上一大問題である。然し『日本書紀』欽明天皇の條下に、佛教初傳の時に於ける事情を說くに當つて

藏經の初傳

「十三年冬十月百濟聖明王、遣西部姬氏達卒怒唎斯致契等、獻釋迦佛金銅像一軀、幡蓋若干、經論若干卷」

と記してある。此の中に「經論若干卷」とあるは、實に日本に於ける藏經の初傳である。しかしながら是れ恐らくは全部であるまい、一部分であつたに相違ない。どんな經論が、どれだけ來たものか、それも解らぬ。しかしその後二十五年を經た時にまた再來して居る。即ち『日本書紀』敏達天皇六年の條下に至りて、

藏經の再傳

六年冬十一月庚午朔、百濟國王、付遣使大別王等、獻經論若干卷、幷律師、禪師、比丘尼、呪師、造佛工、造寺工、六人、

と記してある。されば先きの經論若干卷と、今の「經論若干卷」と、兩方合すれば、幾んど藏經全部が揃つて居たかも知れぬ。縱ひ國小なりと雖も、王者として、我が皇帝に貢獻するのであるから、三卷や五卷のものではあるまい。兩度の貢獻を合すれば、既に藏經が幾んど揃つて居たかも知れぬ。否、眞に揃つて居たであらうと、推測するに、難からん次第である。但し飜つて之を考るに、此の時は未だ藏經なるものの卷數が確定して居なかつた隨つて又藏經全部が來たとも謂い兼ぬる譯である。

然し此の時已に藏經が全部來て居たとしても。其の藏經は、蘇我、物部、兩家軋轢の渦中に投じ、終に燒失して仕舞つたものと見ねばならぬ。既に敏達天皇十四年に、物部弓削守屋大連、自ら寺に詣り火を放つて、佛像及び佛殿を燒くといふことがある。此の時定めし藏經の類も燒けて仕舞つたであらう。

**藏經の燒失**

佛像を燒いて經文を棄てゝ置く筈はない。既に孝德天皇、大化元年に、政治の革新と共に、佛敎を舊に倍し御取立てになる叡慮の詔勅が出た、ことがある。而して其の詔勅文の中に、左の語が見えてある。

（前略）譯語田宮御宇天皇之世、蘇我馬子宿禰、追遵考父之風、猶重能仁世之敎、而餘臣不信、此典幾亡（後略）

是に由つ此を考るに、折角渡來せし藏經も、一時は幾んど、滅亡に歸したものと見ねばならぬ。しかしながら、一時は大半無くなつたとしても、推古朝の時に、陸續として來れる貢僧の手に依つて、又再び之を傳へ來りしは誠に以て疑へぬ次第である。假令彼の方より之を齎し來らずとするも、聖德太子は、屹度自ら人を彼の地に遣はして、之を求められしに相違ない。史乘證すべきものなきは、その傳を逸したのであらう。

**藏經の再傳**

よし推古朝の時尙ほ未だ藏經完全するに至らずとするも、孝德天皇大化革新の時に當つて、佛敎と共に大陸の文明輸入の潮流が、一時に勃興したから、此時必ず迎へられたに相違ない。由て『日本書紀』孝德天皇白雉二年の下に、左の記事が遺つてある。

「冬十二月晦、於味經宮、請二千一百餘僧尼、使讀一切經」

始めて一切經を寫す

更にまた天武天皇の下に至りて、左の記事が出てゐる。

「三月丙戌、朔壬寅、備後國司、獲白雉於龜石郡而貢、乃當郡課役悉免、仍大赦天下、是月聚書生始寫一切經於川原寺」（白鳳二年）

「冬十月辛未、朝癸酉、遣使於四方、覔一切經」（白鳳四年）

一切經を讀ましむ

秋八月辛卯朔乙巳、大設齋於飛鳥寺、以讀一切經」（白鳳六年）

堂々たる國史の上にあつて、かくの如く數々一切經の語を繰返してある。されば已に一切經即ち藏經が來て居たに相違ない。しかしながら、又こゝに斯ういふ考を以て見ねばならぬこともある。或は一切經を寫さしむといひ、或は一切經を讀ましむといふのは、必ずしも全部に限らない、假令一部分のものでも、之に一切經の名を被らせたことがないとも限らない、日本には初め一切經の名のみ應用せられしこと、まづ此の文に於て知るべし。

寫經事業

玄昉僧正五千餘卷の經論章疏を請來す

時に此の藏經傳來史に因み、吾人の研究すべきは、奈良時代に盛んなりし寫經事業である。然るに吾輩未だ此の寫經事業を委しくせざれは、之を他日の機會に讓ることにした。

寫經の事は他に讓るにしても、此に玄昉僧正入唐求法の事を一言せざるを得ない。玄昉僧正は、史家の批評なきにあらされども、奈良朝時代の偉人たりしは、疑はれぬ事實である。此の偉人玄昉僧正は、唐玄宗の開元四年を以て入唐し、同開元二十三年を以て歸朝した人である。而して僧正歸朝の時、齎し來るところの經論章疏、總べて五千餘卷とは、諸傳悉く記するところである。此に於て此の五千餘卷とは、藏經全部を揃へて、請來せしものにあらざるやの疑問が起て來るのである。

玄昉につぎ、殊に此の疑問あるは外でない、玄昉は開元二十

玄昉請來の五千餘卷は一切經か

三年の歸朝である。而して先きに所謂智昇の『開元釋教錄』なるものは、開元十八年、即ち玄昉歸朝の五年前に成就して居る。是に由て此を觀るに、玄昉請來の五千餘卷は、當時新定せられし、五千四十八卷の藏經にあらざりしかの疑問を惹起すも、無理ならぬ次第である。若しこれが新定の藏經にあらざれば、東大寺の夙然大德以前未だ全藏を一時に請來せしものなしと謂はざるを得ぬことになつて來る。よし之ありとするも、史乘不明に屬すとせねばならぬ。

## 二、平安朝以後に於ける藏經の傳來考

### (イ)、入唐八家未だ藏經を傳へず

本邦平安朝の後半期になれば、入唐求法の道も、殆んと斷絶せし有樣であつた。然るに其の前半期、殊に初期の間には、隨分入唐求法の途に就く人も多かつた。しかしながら、無事に入唐求法し來れる人にして、而も又密教關係の人が、總べて八人ある。古來これを呼んで、密教八家と稱し、或は又入唐八家ともいふことになつて居る。左に其の名を擧げやう。



傳教大師最澄、（延暦寺）　延暦二十三年七月入唐、同二十四年五月歸朝、
弘法大師空海、（東寺）　延暦二十三年六月入唐、大同元年十月歸朝、
法琳常曉、　承和五年六月入唐、承和六年八月歸朝、
靈巖寺圓行、　承和五年六月入唐、承和六年十二月歸朝、
慈覺大師圓仁、（延暦寺）　承和五年六月入唐、承和十四年九月歸朝、
安祥寺惠運、　承和九年五月入唐、承和十四年六月歸朝、

（延暦寺）智證大師圓珍、　仁壽三年八月入唐、天安二年六月歸朝、

圓覺寺宗叡、　貞觀三年某月入唐、貞觀九月某月歸朝、

以上入唐八家請來の書籍は、八家各自の『請來目錄』中にあらはれて居る。今其の『請來目錄』を檢するに、各自請來の部數卷數、實に左の通りである。

傳敎大師請來、　合計二百三十部、四百六十卷、

弘法大師請來、　合計一百四十二部、二百四十七卷、

常曉大德請來、　合計三十一部、六十三卷、

圓行大德請來、　合計六十九部、一百二十五卷、

慈覺大師請來、　合計八百四十五部、一千一百四十五卷、

慈覺大師請來目錄に三部あり、其の統計左の如し、

一、日本國承和五年入唐求法目錄　計一百三十四部　二百一卷

二、慈覺大師在唐送進錄　計一百二十七部　一百四十二卷

三、入唐新求聖敎目錄　計五百八十四部　八百二卷

合計八百四十五部　一千一百四十五卷

惠運大德請來、　合計一百二十三部、一百八十卷、

智證大師請來、　合計四百四十一部、一千卷、

宗叡僧正請來、　合計一百三十四部、一百四十三卷、

此の外に密敎の道具類、曼荼羅圖樣、舍利の類を傳來せるもの多しと雖も、今は之を略して記さず。

以上入唐八家の請來を檢するに、最大多數のものは、慈覺智證の二大師である。然るに此の二大師と雖も、一千餘卷の請來である。五千餘卷の全藏請來にあらざりしや、既に明白で

ある。當時若し全藏を請來せし人があつたとすれば、恐らくは八家以外の圓載大德であらう。

圓載は、傳教大師最澄の弟子にして、承和三年、即ち慈覺大師よりも先きに入唐し。而も智證大師歸朝後、尙ほ彼の國に留つて居た人である。即ち圓載の入唐留學は三十有餘年の久しきに及んだ。實に前後無類の留學生であつた。若し此の人が無事に歸朝することを得たであるなら、叡山延曆寺に於て、傳教、慈覺、智證三大師の後を補すべき人なりしや無論である。然るに圓載が數千卷の群書と共に、歸路海底に葬られたのは、如何にも殘念である。『天台霞標』には、この圓載につき色々の記錄が蒐集してある『本朝高僧傳』には要を取つて左の如く之を記載してある。

圓載群書と共に海底に沈む

乾符四年冬十月、儲釋典儒書數千卷、駕李延孝船、大洋逆濤、舵艫皆碎、與延孝俱、一時溺死(乃至)陸氏詩曰、

九流三藏一時傾、萬軸光凌渤海聲、
從此舊編束去復、却應荒外有諸生、

圓載は多年の留學であると共に、多數の書物を持つて歸路に就いたものと見える。然りと雖も、全藏の請來に至つたは、未だ容易に信じ難い。全藏の請來は、終に脊然を以て史傳の始めとすることに、歸着せざるを得ぬのである。

前述の如く當時藏經を一時に齎し來れる人は解らねど、一時に之を寫さんとし、遂に之を寫し取つた人がある。傳教大師最澄、即ち其の人である。吾輩其の壯學は感ぜざるを得ぬから、左に其の傳文を擧ぐることにした。

傳教大師一切經を寫す

時則告談經珍等、我思寫一切經論章疏記等、凡在弟子、各奉教諭、隨梵網之教、依涅槃之文、一心同行、助寫一切經者、叡勝、光仁、經豐等、大師隨寫隨讀、晝夜精勤、披覽新經、粗悟義理、是時山家、本自無備、不能盡部卷矣、唯願七大寺、寺別衆僧、鉢別受一匙之飯、充經生之供、即差使經珍、經藏、妙證等、謹勒願文看於諸寺。時有大安寺沙門聞寂者、道心堅固、住持爲懷、見書爲志、赴應至願、即於其寺別院龍淵寺、助爲此願、傾鉢添供、經生捨功成卷。又有東國化主道忠禪師者、是此大唐鑑眞和上持戒第一弟子也、傳法利生、常自爲事、知識遠志、助寫大小經律論二千餘卷、纔及滿部秩、設萬僧會、同日供養、今安置叡山藏、斯其經也『叡山大師傳』

傳教大師寫經の願文を書く

(ロ)、奇然大德始めて刻藏を請來す

奇然大德の小傳

奇然、姓は藤氏、平安城の人であつた。少年の時よりして、南都東大寺に入り、專ら梵字を習ひ、又三論及び密教を學ひつゝありしが、氣宇豪邁にして、思想亦凡ならず、常に人に語るに、五臺山に登つて文殊の現身を拜し、進んで天竺に往き、佛跡を巡拜せんとする志あり、然るに家に一人の老母あるを以て、未だ此の事を果さずと。然るに一日從容として母に告ぐるに、意志の所在を以てするや、母これを聽て快諾す。此に於て奇然の志一決し、まづ東大寺の常住寺内に於て、大法要を執行し、以て老母の歿後に於ける、七七日の法要の豫修に擬し。然る後六名の徒を引率して、海を渡つたのである。時維れ日本の永觀元年にして、宋の大平興國八年であつた。即ち奇然は、宋太祖の大藏經印刻が始めて出來上つた年に上陸したのである。

奇然老母の許諾を得て入唐す

時に奇然上陸するや、直ちに王城の地に出で、宋太宗皇帝に

齎然宋太宗に謁見す

謁見を求め、且つ献ずるに、銅器十餘品、本朝職員令、年代記等を以てした。處が時恰も太宗方に皇帝の位に即き、海外萬里の事情を自ら之を極めんと欲する意志あつたものと見え。早速謁見を許し、尋ぬるに日本歷朝の沿革史、并に日本佛教史の事を以てした。機敏なる齎然は、之に對する筆答、頗る其の宜しきを得て、大に太宗の意を慰め、且又日本の皇統一系を聽くに當り、太宗及び左右の威慨、一方ならなんだ樣子である。既に彼の國の書籍中、左の如く此の時の事情を記したものがある。

齎然太宗皇帝に對し日本の事を說く

雍熙元年三月、日本國沙門齎然來朝、然言、其國傳襲、六十四世、八十五主、至應神天皇、始傳中國文字、至欽明天皇壬申歲、始傳佛教於百濟、當梁承聖初年、至用明立、有太子名聖德、年七歲、便悟佛法、於菩提寺、講勝鬘經、感天雨華、始遣使入中國、求法華經、當隋開皇中也、至孝德立、白雉四年、遣僧道昭入中國、從幷法師傳法、當唐永徽四年也、次足姬立、令僧智通入中國、求大乘法、當顯慶三年也、次文武立、寶龜二年、令僧玄昉入中國、求法、當開元四年也、次孝明立、天平勝寶四年、遣使入中國、求內外教典、當天寶中也、次元武立、遣僧空海入中國、傳智者教、當元和年中也、次文德立、令僧常曉入中國、求釋迦密教、當大中年也」

上聞其王一姓傳繼、臣下皆世官、謂宰臣曰、島夷君臣、乃能世祚永久、若是」　齎然求詣五臺、及回京師、乞賜印本大藏經、詔有司給與之、（『佛祖統紀』第四十四、）

以上二三誤謬なきにあらず、僧空海は僧最證の誤謬ならん、然りと雖も當時にして、彼の國の書中に此の事を記すものは、齎然の說明其の宜しきを得た

るを想察するに足ると謂ふべし。

**奪然五臺山に詣す**

太宗皇帝、奪然の人と爲りを看破する所ありしや、其の優遇大に至り、一行を太平興國寺に宿泊せしめ、特に紫衣を賜はり、また法濟大師の稱號をも宜下す。しかのみならず、進んで五臺山に詣せんとするを許し、勅して往復の行路皆食を續がしむとある。所謂官費旅行のやうなものであつたと見える。

**奪然刻本の藏經を受く**

奪然は已に五臺山に詣し、多年の宿志を遂げ、歸路再び帝都に出でて、太宗に謁し、請願するに刻本の藏經一部下賜の事を以てした。太宗早速之を許可し、左右に命じて其の一本を與へしめた。かくの如き順序に依り、彼の國に初めて成れる刻本の藏經が、東大寺奪然の航海運動其のよろしきを得て、成刻後僅に六年を經て本邦に之を請來するとになつたのである。



奪然の功實に偉なりと謂はねばならぬ。

奪然は唯大藏經の請來のみを以て大名をなさず、又世に三國傳來と稱する、嵯峨清涼寺の釋迦如來を迎へ來る所に於て頗る盛名を擧げた人である。即ち奪然は永延元年を以て筑紫に歸着し、其の翌年二月を以て、所謂三國傳來の佛像に、五千餘卷の刻本藏經を奉請し來つて、自ら之を供養し、京師に入る時の盛觀は、恰も嘗て玄奘三藏が、十七箇年の印度留學を終へて、長安に歸着せし時の如き盛觀であつた。即ち勅命に依り宮中雅樂寮よりは特に樂人を出し、音樂を以て途に之を迎へしめ、畿內の貴賤は群をなして、其の列に加はる者の外は、皆之を拜觀し、其の盛況實に前代未聞といふべきものであつたと見える。

**奪然歸朝の盛觀**

**刻本藏經初傳の概況**

是れ刻本藏經初傳の概況である。

爲然以後所傳の研究

爲然以後の所傳に至つては、吾輩今此に之を盡くすこと不可能である。宋太祖以後、續々として彼の地に藏經を開板するものがあつて、本邦にも漸く之を傳來するものゝ數を增して來たことは、事實である。即ち宋本、元本、明本、及び麗本の如き、皆傳來したのであるが、其の傳來史を一一明瞭にすることは、何人も容易の業でない。而も常盤大定君の研究もあることとなれば、今は彼れに讓ることにした。

## 三、日本に於ける藏經の印刻史

### (ハ)、日本に於ける印刻の起原

我が日本に於て大藏經全部を印刻することになつたのは、德川時代である。しかし何事も其のこゝに至れるは、容易のものでない、必ず皆古き歷史を有つて居るものである。そこで

奈良朝時代の印刻

今日本藏經の印刻史の由て來れる根原を尋ぬるに、已に奈良朝時代にありと謂つてよい。天平寶字八年、惠美押勝の亂を平ぐるや、時の孝謙天皇こゝに大願を發したまひ、勅して一百萬基の小木塔を作らしめ、其の中に納むるに、四種の陀羅尼（根本陀羅尼、相輪陀羅尼、自心印陀羅尼、六度陀羅尼）を以てせられたのである。其の小塔は、今尙ほ大和國法隆寺に、凡そ一萬基を保存せることは、隱れなき事實である。此の四種陀羅尼は、何を云ふにも、百萬といへる多數のものであるからして、此の時始めて印刻の考を發したものと見える。これが實に我が日本に於ける印刻術の起原にして、又其の起原が佛敎弘通の叡旨より開かれしとは、何んとありがたいことであるまいか。『續日本紀』第三十二卷には左の如く之を記してある。

日本印刻の起原

「神護景雲四年四月戊午、初天皇八年亂平、乃發弘願、令造三重小塔一百萬基、高各四寸五分、基徑三寸五分、露盤下、各置根本、慈心、相輪、六度等陀羅尼、至是功畢、分置諸寺」

但し『續日本紀』の文には、印刻したことが明瞭になつて居ない。之を『東大寺要錄』に照して見ると、明かに「無垢淨光陀羅尼摺本」としてある。印ち左の文を見るがよい。

神護景雲元年丁未、造東西小塔堂、實忠和尚所建也、天平寶字八年甲辰秋、九月十一日孝謙天皇、造一百萬小塔、分配十大寺、各籠無垢淨光陀羅尼摺本、（「無垢淨光陀羅經」は、凡そ一千一百字を以て成る、前に謂ふ所の四種陀羅尼是なり、）

されば奈良朝時代に、已に印刻術の始れるは、誠に以て明瞭な事實である。隨つて平安朝時代に移るや、此の業の大に進み來れるは、固より言ふまでもないことである。其の最初は

平安朝時代の印刻

傳教大師の『法華經』及び『仁王經』、それから義眞の『成唯識論』及び『大智度論』である。かくの如く大部のものが、平安朝の初めに當つて、早已に陸續として印刻せられたものとすれば、僅に數十年の間に於て、洵に驚くべき進歩發達であつたと謂はねばならぬ。

鎌倉時代室町時代の印刻

平安朝の初期にあつて既にかくの如く大部のものが印刻せらるゝやうになつて來たなら、更に鎌倉時代を經て、室町時代に至れば、愈々益々印刻の業が盛んに開け來り、啻に學問研究のため、又は佛法弘通のためといはんよりも、寧ろ追善のため、報恩のためといふ精神よりして、之を刊行せるものが非常に多かつた。但し平安時代は『法華經』が最も多かつた。鎌倉時代になると、法然上人の『選擇本願念佛集』が數回印刻せられ

たやうである。又般若部、及び密部のものも多く印刻せられて居る。これらの事は、既に朝倉氏の『日本古刻書史』に詳細を極めてあるから、此に敢て贅辯を煩す必要はないと思ふ。又常盤大定君は、足利尊氏が、藏經刊行の計畫をなせし事實を、種種の方面よりして考證せられたから、これまた吾輩が敢て蛇足を畫く必要もないことゝ思ふ。但こゝに一言致したいのは、前にも一寸謂つた虎關和尚の『元亨釋書』である。

元亨釋書入藏の願

虎關諱は師錬、聖一國師の法孫にして、南禪寺に住し、英名一世に轟かすのみならず、遠く萬世に輝かすべき英傑であつた。此の人の著書多しと雖も、就中萬世不朽の傑作は『元亨釋書』三十卷である。これ實に日本僧史の權輿として、頗る有名のものであるが、虎關は本書の成るを竢つて、一の上表文を添へ、時の朝廷に獻本し、求むるに入藏の事を以てした。時は元亨二年八月十六日である。當時南北朝分離の戰亂に際し、國家頗る多事なりしにも拘はらず、朝廷之を詮議し、延文五年六月を以て入藏頒行の許可を得て、貞治三年正月を以て之を印行するの運びに至つたのである。

元亨釋書入藏の許可並に其の印行

時に吾輩嘗て、貞治槧本が、今の內閣文庫に、三十卷の內、六卷を保存してあるのを見たことがある。紙質甚だ善良、印刻も亦極めて鮮明なものであつた。さて其の題下には左の文字が刻してある、注意して見るがよい。

大日本國、延文庚子六月、有旨入毘盧大藏、海藏院寓居比丘單況等、謹募衆緣、恭爲今上皇帝、祝延聖壽、文武官僚資崇祿位、國泰民安、命工鏤梓、與大藏經印板共行、一部計三十卷、時貞治三

年正月日謹題、

是に由て、此を見るに、勅許に依り私版を起し、之を泊來若しくは官版の藏經と與に流行せしむるやうにする考へであつたものと見える。時に此の『元亨釋書』は尙ほ數回開版せられたものである。而して後は官より費用を給した樣子である、即ち左の記錄を見て、此の事を明むると共に、當時開版の如何に不容易なりしやを知るかよい。

空華日工集（僧周信著）曰、元亨釋書、乃日本高僧傳也、開版之費、賜江州某田地、今年開版已成、其版亦燼、可惜也、蓋爲再刊之張本、故特及之、君（義滿）領之（『日本古刻書史』に據る）

## （ロ）、天海僧正の活字藏經成る

前述の如く、奈良朝時代にあつて、已に其の端を發きし印刻事業は、爾來漸く發展し、平安朝を經、鎌倉時代を過ぎ、室町時代に來つて、益印行術の發展を促し來り、此の間に已に木板の活字も始まつて來たしながら唯佛書ばかりであつた。儒教の部は、室町時代に來り、始めて印行せらるゝものありと雖も、極めて小數のものである。到底佛教の書籍印行に比肩すべきものでない。

印刻は佛書より始まる

獨り室町時代のみならず、德川時代に來てからでもさうだ。德川時代に來れば、儒書のみならず、神道の書類其の他雜書の印刻頗る多しと雖も、佛教家の大藏經印刻の如き大業を發したものはない。『溫古堂塙先生傳』に『群書類從』六百七十卷の開板成功を記して、「かく大部の書上木せし事これにこゆるものなし」と謂つてあるのは、佛教徒中に藏經開板の大業あるを

德川時代に於ける印刻の發展

知らざるより來る妄言である。即ち德川時代に及ぶや、前後二回も藏經全部の印刻を見ることになつたのである。

一、天海僧正の活字藏經

二、鐵眼和尚の開板藏經

天海僧正の事業

是れなり。天海僧正は德川時代に於ける僧中の偉人である、啻に學力の秀逸なるのみならず亦以て、事業の經營者である。啻に事業の經營者なるのみならず、亦以て雲上の信認を厚くし、公邊の歸依を得るに於て、眞に稀有の人であつた。初め武田信玄に重んぜられしが、後德川家康、德川秀忠、德川家光の三代よりして、異數の厚遇を受け。更に又後陽成上皇、正親町上皇、二帝の恩顧を蒙りて、新たに日光を開き、東叡山を興し、又叡山延曆寺を再興せし事業は、眞に偉大である。德川時代



天海僧正の効績

に於ける天海僧正は、平安朝時代に於ける慈惠僧正より以上の効績を、天台宗の上に遺すと謂はねばならぬ。實に彼れは偉人であつた、かくの如き偉人は寛永二十年十月二日、一百三十餘歲の長齡を以て終つた。生きては大僧正の極官に昇り、死しては慈眼大師なる諡號宣下の恩典に預つた人である。

天海僧正の刻藏は一の附帶事業

さて此の天海僧正が、木製の活字板を以て藏經を印刻した、これが日本に於ける藏經印刻の嚆矢であるとすれば、其の功や頗る大なりと謂はねばならぬ。しかしながら彼の日光を開き、上野を興し、又延曆寺を再興せし大業に比すれば、一の附帶事業にして、殆んど數ふるほどのものでないと謂つてよい、師蠻が本傳中に、之を記載せざるも此の譯であらう。事は寛永十年に始つて、慶安元年に成就したのであるから天海存生

中に成らずして歿後五年を經て漸く出來たのである。但し毎卷の尾に、左の跋が入れてあるとのことである。

奉雕造　佛說一切經藏
今上皇帝　玉體安穩　東照權現　倍增威光
四海泰平　國家豐饒　佛法紹隆　利益無窮
征夷大將軍左大臣源家光公吉祥如意
日本武州江戸東叡山
山門三院執行探題前毘沙門堂大僧正天海願主

天海版の跋文

吾輩は未だ此の天海本の御經を披閲せしことの無いものであるから、何とも之を評すべき資格のない者である。しかし既に之を披閲せし、玄智の『考信錄』には之を評して、左の如く謂つてある。



天海版の不成績

「慶安元年、江戸東叡山天海ヲシテ和板ノ藏ヲ開ケリ、然レドモ今ハ廢シテ行レス本山經藏ノ本コレ、其板本ナリ、嘗テ驗スルニ並ガ岡ノ宋本ヲ模刻セリト見ユ、板ハ植字ナルニ似テ、錯誤多ク、シテ、相似タル字ハ混濫セリ、行レザルモ可ナラン。

天海本は、何故か、甚だ小數にして、而も好成績でなかつたといふことは事實である。隨つて世に天海本といふものは、殆んど認められて居ない狀況である。そこで此の天海本の不成績を見て、奪然蹶起せし者は實に黃檗の鐵眼和尚である。

鐵眼和尚の史傳

## (ハ)、鐵眼和尚の黃檗藏經成る

鐵眼といふは字である。諱は道光。寛永七年正月朔日を以て、肥後國益城郡に生れた人である。姓佐伯氏、父の名は淨

信、篤く佛教を奉じ、晩に蓮社に入る。（一說に鐵眼は眞宗寺院に生るといふと雖も、諸傳之を示さず『鐵眼和尚行實』の中に父歿するや、其居宅を轉して三寶禪寺と爲すといふ、されは眞宗寺院にあらざりしと知るべし、）年甫めて十三歲郡の海雲法師に投じて薙髮し、是より僧業を習ふ。即ち十七歲の時、豐前の永昌法師に就いて『起信論』の講義を聽き、此の時既に同輩の注目する所となつたのである。思ふに此の海雲法師幷に永昌法師といふのが、或は眞宗の人であつたかも解らぬ。既にして慶安三年笈を負て京師に出で、諸方の講席に遊び、螢雪の勞を取ること約五年であつた。

鐵眼遂に黃檗宗の人となる

此の時に當つて、黃檗の隱元禪師、來つて長崎にあるを聞き。千里を遠しとせずして、自ら彼の地に赴き、忽ちに衣を改め、從前の所學を放棄して參禪辨道の門に入りしが。既にして隱元は攝津普門寺の請に應ずることになつた。然るに鐵眼は

鐵眼は教禪一致の精神なり

尙ほ彼の地に留まり、隱元の上足木菴和尙に事へ其の薰陶を受けた。さういふ譯であるから、他日遂に木菴に嗣法することになつた、乃ち隱元の直弟である。

要するに鐵眼は黃檗宗の人になつた、禪宗の人になつて仕舞つた。しかし鐵眼は禪宗の人になつても、敎禪一致の精神を持つて居た。故に常に東西に奔走して、席暖まることなく、諸方に講席を張つたものである。しかし大阪を中心となし、江戸及び九州の間を往返し、而も其の講ずる所は、多く『楞嚴經』であつた『楞嚴經』は眞に鐵眼の得意とせる所であつたと見える。

敎禪一致の精神たりし鐵眼和尙は、本邦未だ藏經の板木の無いのを見て、慷慨悲憤すると限りなく、是を以て啻に敎界の

鐵眼の刻大藏緣起疏

不備と爲すのみならず、亦以て國家の大恥辱と考へた。しかのみならず、鐵眼は「菩薩萬行中流通法寶爲最」といへる經說を深く信じたものである。そこて猛烈なる大決心を以て、藏經開板の壯擧を獨斷的に決し、遂に左の檄文を草し、以て廣く天下の有志を募つたのである。題してこれを『刻大藏緣起疏』といふ。

蓋聞、摩騰入漢、五部之金、文始至玄奘回唐、三藏之聖敎斯彰、揭慧日於中天、開群生之覺路、由是尋文翻譯者、碩德聖師輩出、竭衷向化者、鉅卿偉士咸依、宜其廣扇慈風於當代、周施法雨於寰中者也。

然自六朝、以過唐宋元明、大法流行、莫盛乎中夏、海內大藏經版不下二十餘副、或存禁中、或鎭名山、如星分碁布、在在有之。

妙宇道人金壹千兩を投す

吾邦古稱佛國、自欽明天皇之世敎始東被、至于列聖相承、存神眷注、宰臣士庶、率土崇奉、合而觀之、不遜身毒支那諸域、猶大藏之版、向未有刊行於世者、殊爲闕典、每與山林多士、譚及、莫不爲慨。

予也生當像季、幸廁僧倫、竊叨佛天覆蔭、常切法藏流通、一念萌之胸次、蓋有年矣、奈時緣弗遇、徒有其願、不能爲力、是夏入洛、禮謁黃檗和尙、啓告是事、蒙和尙喏然讚許、予亦喜之弗勝、姑捐衣盆之資、與二三好善君子共之、先請藏中最關要者數函、梓行、亦猶積土成山、積水成河之意、庶幾異日有見賢思齊者、樂然雲從、圓成全藏、未可知也(以下畧之)

是より先き鐵眼和尙、大阪に來り、市內月光寺に於て『起信論』を開講し、席上例に由て刻藏の必要なる所以、及び自己の志願を

告白するや、聽衆の中に、觀音寺の妙宇道人あり、和尚の壯擧幷に意志の頗る猛烈なる所に感激し、金一千兩即納を約束した。此の壹千兩は、實に鐵眼和尚の事業をして、成功せしむるの基礎になつたのである。

鐵眼の事業成功の基礎

鐵眼多年此の事を願へども、餘りの大業にして未だ容易に着手の場には至らなんだ。處が壹千兩の大金を得て、倉皇黃檗山に走り、隱元禪師に此の事を告げた。隱元の喜悅亦以て啻ならず、早速自ら所持し來れる所の藏經即ち明本一部を與へて、之を原本となさしめ。更に又山內の一勝地を選び、版木の置場を造るの用地たらしめた。

是に於て、鐵眼は假令一部分でもの考よりして、先づ其の端緒を開き、其の印房は、京都に於て之を始め、既成の板木は黃檗に之を運ばしむることにした。即ち黃檗の山內に三棟の寶藏院を造り、之に納めしめたのである。前の『刻大藏緣起疏』は、着手以後の起草である。既に着手せるや、鐵眼の人德と精力と相待つて、意外に成功が早かつた。即ち延寶六年七月十七日を以て、上表文を製し、鏤版の竣功を待ち、六千七百七十一卷の大藏經全部を、時の朝廷に獻納した。更に天和元年を以て自ら江戶に赴き、一の疏文を添へて、同じく六千七百七十一卷の大藏經を揃へて、時の德川幕府に之を進上した。而して其の翌年正月、宛も自ら豫期する所あるが如く、倉皇江戶の地を辭して歸阪し、同年三月二十二日、自房瑞龍寺に於て最後を遂げた、壽五十有三。

鐵眼の事業遂に成る

鐵眼は刻藏のための出世

是に由て此を觀るに、鐵眼和尚は、全く藏經開板のため世に出た人のやうに見える。最初の發願は解らねど、なんでも寬

文以前よりして、意中已に此の經營を爲しつゝあつたものと察せらる。而して爾來殆んど二十年を要し、遂に之を竣功するや、先づ時の朝廷に之を獻納し、尋いで幕府に之を納め、事終つて未だ數月ならざる間に、故人になつて仕舞つたのである。

天海僧正と鐵眼和尚との比較

から、和尚の生涯は實に刻藏の一事にありと謂つてよい。

先きに天海僧正が、德川政府の後援に依り、活字を以て印刻すといふと雖も、製本は數部に限り、其の益するところ亦以て多なりとは謂ひ難いのである。然るに今鐵眼和尚獨力の經營に係はる槧本の藏經は、其の益するところ、實に多大である、日本全國の各寺院は、宗派の何たるを問はず、其の一本を購ひ求め、特に一の經藏を造り、以て寺の境內を莊嚴することになつたのは、實に鐵眼和尚の遺德である、餘光である、遺物である。

鐵眼の仁行

鐵眼の眼中に天海本はなかつた『刻大藏緣起疏』『進新刻大藏經表』『上大經疏』の三文共に、同一の筆法を以て、本邦古來未だ刻藏なき闕典が陳べてあるのは、其の證據だ。是れ恐らくは天海本の不成績に鑑みる所あつたからのことであらう。

時に鐵眼和尚の傳につき、國の饑饉に遇ひ、折角集まりし刻藏の用意金を捨てゝ、窮民を救助せしこと數回に及んだといふ說がある。されど吾輩未だ其の典據を見當らない、是れ恐らくは俗說であらう。しかし天和二年、即ち自ら歿する年の春に當り、多くの窮民を救助するあつて、時人救世大士と稱するに至れりと謂つてある。且つ傳に其の性格を記して、

弘慈利物、一出于天性、貧者與衣食、病者餉湯藥、路見棄兒、則托人乳養、途遇囚人、則訴官請免、

と謂つてある。惟ふにかくの如き性格の人であつたから、かくの如き大業も遂に成就したのである。

## (二)、忍澂上人の藏經對校

鐵眼の事業に對する後人の小言

鐵眼和尚の事業は、實に偉大であつた。日本佛敎史上、特に藏經史の上にあつて特筆大書すべき價値がある。一個人の精力を以て、これ丈の大事業を爲し遂げた人は古來稀である。然りと雖も、又後人をして之を謂はしむれば、之を爲すことの急務なるに奪はれ、其の原本を選擇するの遑なかりしを、一の恨事となすことになつて來た。明本によらず、麗本を以て版下にすればよいのだ、開板する位なら數本を對校して後これを刻すればよいのだとは、當時の事情を少しも辨へざる後人の小言である。

鐵眼は原本を選擇するの遑なし

吾輩少しく當時の事情を察するに、對校の不容易なるのみならず、麗本を得て之を版下となすことも當時にあつては到底不可能の事である。鐵眼が若しもそんな事に苦慮して居たなら、彼の事業は成功に至らずして終らざるを得ぬといふことは、火を見るよりも猶ほ明かである。故にこれを以て鐵眼を攻むるのは頗る酷の至りである。

とはいふものゝ、槧本が明本の飜刻にして、麗本の飜刻にあらざりしは、實に萬世の恨事である。由て此に忍澂上人、及び丹山法師の如き人あつて、藏經對校の勞を敢て厭はざることになつて來たのである。

忍澂上人の小傳

忍澂字は信阿、自ら葵翁と號す、姓は二見氏、江戸に生れ、初め芝增上寺の直傳上人に就いて出家し、幼にして秀才、且つ勤勉

を以て聞えし人なるが、寛文元年は宗祖法然上人の四百五十回忌に當る年であつて、又忍澂自ら十八歳になれる年であつた。

忍澂上人の發願

此に於て忍澂は無限の感に打たれたのである。抑本年四百五十回忌に當れる宗祖法然上人は、嘗て叡山功德院の皇圓阿闍梨の處に在りて修學せしも、十八歳の春を竢つて、所志を決し、黑谷の慈眼房叡空の所に隱れ、眞實菩提の道に入られたでないか。已れ亦本年十八歳になれり宗祖法然上人に倣ふ所なくんばあるべからずとは、忍澂上人感激の動機であつた。

獅子ケ谷に法然院を開く

この動機により竊に增上寺を辭し、京都に出で、自らは遠く宗門の革新を期しつゝありしが、遂に知恩院の住持萬無玄和尙と相議し、洛東獅子谷に法然院を開き、以て不斷念佛の大道





場となし、忍澂上人獨得の念佛を弘通したのである。之を要するに忍澂は、當時淨土宗鎭西流にあつて、一異彩を放てる希有の道德家であつた。極端なる精力家にて又克己心の最も勝ぐれた人であつた。

忍澂の藏經對校

處が此の忍澂上人。嘗て黃檗本の『心地觀經』を披閱して、經文中往々誤字あることを發見し、爾來善本を得て、藏經全部を對校し、以て日本藏經の模本を造らんと欲すと雖も、容易の業にあらざれば空しく希望を懷けること玆に三十年の久しきに及んだ。然るに寶永三年（黃檗本成つて三十年目）遂に宿願を果さんと欲し、江戸增上寺學寮よりして、十有餘名を選出し、之を獅子谷法然院に請じ、黃檗本を以て、京都建仁寺所藏の高麗本を借用し、これと對校の業を始めしが、寶永七年四月を以て、全部對校の

日本藏經の模本成る

鴻業方に成就したのである。六千餘卷の藏經は、此の間に於て皆悉く三回の對校を加へ、詳かに其の異同を調査し、誤謬を訂正し、以て日本藏經の模本となしたのであるが、其の功や亦決して少くない。

忍澂は對校の事終るや、自ら『大藏對校錄』一百卷を製する考であつたが、圖らずも此に微恙を發し、終に自ら起つ能はずして、正德元年十一月十日、春秋六十七歲にして終つた人である。時に藏經の對校に就き忍澂より以上の苦辛を忍びし者は丹山法師であらう。

丹山法師の小傳

## (ホ)、丹山法師の藏經對校

丹山諱は順誓、越前國丹生郡糸生村淨勝寺(眞宗大谷派)に生れた人である。父の名は順惠と稱し、歌をよくす、母信子もまた歌を樂めりといふ、されば其の家庭のほども粗察することが出來る。丹山生れて僅に四歲、已に『阿彌陀經』を暗誦す、年甫て七歲の時、同國永臨寺住職深勵(眞宗大谷派學頭)之を見て偉器となし受けて以て弟子となす、亦以て少年の穎才なりしを知るに足ると謂つてよい。

丹山の遊學

丹山は二十一歲以後京都に遊學した、其の目的佛學にありしは固より無論であるが、其の餘力を以て、詩歌書畫等の諸藝に通ぜんとし、賴山陽を筆頭に、賀茂季鷹、村瀨栲亭、貫名海屋等の諸名家と交りを結び、これら諸名家よりして、頗る重視せられたものと見える。既に賴山陽の如きは、丹山のため特に「不如歸亭記」一篇を撰し、肉筆を以て之を書し、丹山に送つた。其の眞蹟今尙ほ淨勝寺の所藏となつて居る、されば其の人と爲

りの如何亦推して知るべきである。

丹山の藏經對校

時に丹山嘗て『金剛經』を一讀するに、解り兼ぬる處あつて、之を高麗本と對校し、始めて麗本の槀本に優れたることを知つた。後家に歸つて、父順惠に告ぐるに此の事を以てするや、順惠熟慮し、されば汝槀本を以て麗本に對校し、以て藏經の模本を作るべしと、即ち藏經對校の鴻業を命じたのであるが。順惠亦尋常の人にあらざりしを知るに足るでないか、斯の人にして此の子ありとは、實に順惠丹山の二人である。

丹山の失敗三度に及ぶ

但し丹山も、初めは忍澂の校本を寫すことの捷徑なるを考へ、獅子谷法然院に詣り、忍澂本の謄寫を願ひしに、最初之を許可せしにも似ず、忽ちにして或る事故のため又之を謝絶せられたのである。そこで丹山志を決し、建仁寺に往き自ら對校せんと欲し、麗本の借用を住僧通・銓・に向つて願ひしに、恰も通銓は公用のため對馬に赴くべき事故あるを以て之を謝絶した、乃ち丹山は二度の失敗を重ねたのである。されど聊も意志の屈するとなく、それより各方面に向つて麗本の所在地を尋ねしに、江戸增上寺にありと雖も、これは獅子谷と同樣、借用の難きは言ふ迄もなく、其の他は獨り對馬國木坂神社に一部保存せることを探知し、遂に金一千兩を質となして之を借覽せんと欲し、其の周旋を彼の地に滯在せる建仁寺通銓に依賴したのである。通銓彼の地にありて大に周旋すと雖も、國禁の故を以て、又同じく謝絶せられたのである、乃ち丹山は三度の失敗を重ねた。

丹山再び建仁寺の麗本を借らんとす

然るに幸なるかな、文政八年冬、建仁寺の通銓は公用を果し

歸京したのである、丹山之を聞くや、喜び勇んで再び建仁寺に往き、先きの請願を繰返した。通銓も其の熱誠を見て、謝するに道なく、遂に建仁寺内にあつて對校することを許した。此の時に於ける丹山の喜悅思ひ知るべきである。丹山即ち歸國し、事の由を父順惠に告げ、實子順尊・賢護の二人を引率し來り、親子三人相依つて、建仁寺に寓居し、藏經對校の鴻業にかゝつたのである。但し父子四人の外に、二名の補助者があつた、即ち伊勢國博善寺大春、近江國泉福寺香巖の二人である。

父子四人相依て藏經を對校す

而して文政九年（丹山四十二歳）より天保七年（丹山五十二歳）に至る、十有一年間に全部三度づゝ校正し、一點一畫と雖も、洩すことなく之を對校し、更に黃檗本に缺少せるもの五百有餘卷を謄寫し了つた。

十有一年間に成功す

先きに忍澂の對校は寶永三年二月十九日に初め、同七年四月に至るまで、即ち四年四ヶ月を以て了つたのである、然るに今度丹山の對校は、十有一年の時間を費して居る。蓋し是れ忍澂は十有餘名を以て之を爲し、丹山は親子四人に二名の補助者を以て之を爲したからである。時間と人數との比例を取れば、烏渡同じやうな時間を以て成功せしことになつて居る。

思ふに先きに忍澂の對校は、假令增上寺の補助がなくとも、知恩院よりして相當の援助をなしたことであらう。然るに丹山に至つては他に應援するものはなかつた、本願寺ありとは雖も、坐視傍觀して居つた、實に親子四人の精神一到の結果である。鐵眼の刻藏は天海に比して大に同情を寄すべきものであるが如く、丹山の對校は忍澂に比して又一層精神的であつた。

父子孫の四人相依て所願成就す

即ち父の順惠は家にあつて資本を繼續し、子の順尊及び

賢護は、よく丹山の命を奉じ、丹山自らは其の中心となつて、遂に此の事を成就せしめたのである。丹山建仁寺にあつて藏經對校中、元旦の詩あり、左に掲げて置かう。

客居不見拜年人　空竹簷梅猶相見
忽被黃鸝呼夢破　起開經卷坐清晨

東本願寺の命に應じ一部を謄寫す

「精神一到何事不成」の古語の如く、丹山の藏經對校は、天保七年を以て成功した。處が其の翌年九月二十七日、建仁寺に出火あつて、彼の高麗本は皆悉く灰燼に歸したのである。此に於て丹山の勳功愈々以て偉大のものとなり、嘗て坐視傍觀せし東本願寺も俄に注意することになつて來た、即ち丹山に命じて、更に一藏を校讎し、之を本山に納めしめんことを要求した。そこで丹山再び之を轉寫することに取りかゝりしも、未だ之を果たさずして病に罹り、弘仁四年九月二十九日春秋六十三歲にして故人になつて仕舞つた。しかしながら丹山末後に臨み、長男順尊に囑する所あり、此に由て丹山の歿後、順尊父の意志を繼き、之を轉寫して東本願寺に納本せしめたのであるが其の本は、今や大谷大學の藏書になつて居る。また越前淨勝寺の對校本も、今に恙なく本寺の經藏に保存せられて居るさうである。吾輩不幸にして未だ之を閲覽するの機會を得ぬのは頗る殘念に思ふ。

丹山の對校本の現存

## 四、明治時代に於ける弘教書院及大藏經

### 書院の開設

徳川時代と明治時代とは、百事別天地の狀をなせることは、多言を費すの必要あるまい。其の百事別天地に就き、印刷事

一切經の由來

業の發展は、最も重なる要部を占めて居ることも亦說明を要せぬことである。例せば德川時代にあつては、學者が終生の苦心に由つて成れる著書も、空しく著者の家に之を保存し、入室の弟子にあらざれば、之を披見する能はざりしものが、近頃續々として印刷に附し之を公にすることゝなりしは、皆人の知る所であるが、是れ偏に泰西輸入の印刷術應用の結果である。其の効果眞に著しきものにして、之を旅行に譬ふれば、徒歩旅行と汽車旅行よりも、尙ほ其の相違の甚しきものありと謂つてよからう。そこで此の機に乘じ、泰西輸入の印刷機械全部を、古來いと慘澹たる苦心經營に由て成れる刻藏の上に運用せんことを計りしものは、弘敎書院であつた。

泰西印刷術の應用

弘敎書院なるものは、時に芝增上寺住職たりし行誠上人を



首領に仰ぎ、島田蕃根、山東直砥等の諸氏の協同事業として成れるものである。前述の如く已に泰西の印刷術を、我國に應用する時節とはなれるものゝ、今日に比すれば、尙ほ過渡時代にして、百時幼稚なりしことは、到底筆紙に盡くされたものでない。又其の當時は維新排佛の餘習猶未だ去らずして、初めは其の經營上頗る困難を來した樣子であつた。然るに幸にして兩本願寺が幾多の校訂者を送り、又一千部づゝ引受けたので、遂に事業の進行を見ることになつたのである。世に呼んで縮刷藏經と稱するもの即ち是なり。

弘敎書院の設立

縮刷藏經の特徵

縮刷藏經の特徵をいへば、校訂は誤謬なきにあらざれども、兎に角、麗本、宋本、元本、及び明本の四本を對校し、而も彼れに缺けたるものは此れを以て補ひ、此れに無きものは彼れに依つ

學者間に與へし効果

て此れに足し、而も祕密部の如きは、本邦舊傳のものを之に加へて、原本四藏の中にも未だ之なきものを編入せしめ、又之に加ふるに、傳敎、弘法、榮西、源空等の如き高僧諸師の手に成る日本選述のものを添へ、合計一千二百十六部八千五百三十四卷を、明治十三年より同十八年七月に至る間に印刻したのである。

古藏に比すれば、まづは善本と謂つてよからう。

而も彼の黃檗本なるものは、諸方の名刹に之を購入して、經藏の中に案置すといへども、之を閱讀せるものは甚だ稀なり。然るに縮刷藏經に至つては、多く學者の座右に控えられ、近來學問の漸次開くる時に當つて、この縮刷本の利益を與へし効果は、眞に偉大である。此の點に於ては、遙に黃檗本以上に位すと謂つてよいと思ふ

藏經書院の設立

藏經書院は、明治三十五年を以て、京都に設立せられたものである。是より先き、竹村秀信、池田誓信の兩居士ありて、有志と相計り、佛敎圖書出版會社を興さんとして、事未だ十分に成就せざる間に、兩名共黃泉の客となつて、仕舞つた。

時にたまたま濱田竹坡居士あつて、鋭意熱心に本會社を整理し、之を藏經書院と改稱すると同時に、大藏經全部刊行の事を計畫した。爾來着々其の業を進ましめ、三十五年の四月より、三十八年の四月に至る四箇年の間に所志を遂げた。無慮三十六帙、三百六十册あつて此の中に六千七百七十一卷が收めてある。即ち其の原本は明藏にして、忍澂上人の對校本を應用したのである。

藏經書院刊行本の特色となす所は、紙面を上下二段となし、

藏經書院刊行本の特色

以て之を讀過し易からしめんとし。又本文に訓點を加へ、以て漢文を讀むに苦しむ者をして、容易に之を讀ましめんとし。而も先きの縮刷藏經は五號活字を用ひしに、今之を改めて四號活字となすが如き所に存すと謂つよい。

世の進歩に連れ、書籍の漸次小形になり來れるは、各國の常例である。然るに明治十三年に始まれる弘教書院は、五號活字の小本となし、明治三十五年に起れる藏經書院は、却て四號活字の大本となせるは、頗る意外の現象である。これには弘教書院は東京に起り、藏經書院は京都に起つた影響が、無いでもあるまい。

今弘教書院創立の時に於ける事業と、藏經書院創立の時に於ける事業との、難易を比較するに、二十有餘年を隔つる結果

大日本續藏經成る

として、殆んと比較すべからざるものあつた、後者は前者に比するに、多少營業的意義を含むと謂つてもよいと想ふ。更に之を鐵眼和尚の事業に比すれば如何。進んで室町時代の初めに於ける彼の『元亨釋書』三十卷の印刻に比すれば如何。彼此同日に論ずべからずとは眞にこれらの事である。

時に藏經書院は、正藏刊行の完結を待つて、後更に『大日本續藏經』と題し、支那撰述のものにして、未だ入藏とならざるものを蒐集し、來り、前後十年間の繼續事業となし、遂に之を成功した。無慮一百五十套、七百五十冊に及んで居る。其の內容を尋ねると、九百五十餘人の著作にして、一千七百五十餘部、七千一百四十餘卷ある、即ち正藏と大差なきのみならず、若し其の紙數を問へば、殆んど彼に倍するものあるは、誠に驚くべき

である。

## 第五章　結論

大藏經に關する事どもを、それからそれと尋ねゆけば、實に無際限である。朝鮮、支那、西藏經等のことは、到底不可能としても、日本國の內に於ける藏經關係の歷史のみにても、之を委しくせんとすることは、眞に不容易の業である。

研究の事項

たとへば、先きに忍澂丹山の兩名が、必至になつて對校せし建仁寺の高麗本は、嘗て他に其の全部を謄寫せし事實がある。それは妙心寺の禪僧にして、其の寫本は今尙ほ妙心寺に保存してあるといふことである。又高麗本といへば、殆んと建仁寺所藏のものより外になきが如く、皆此の本を借りて、或は對





校し、或は謄寫したのであるが、當時高麗本は、此の外に又江戸の芝增上寺にあり、又安藝の宮島の神宮にも壹部あつたのだ。而して宮島の本は、今や東本願寺の所藏となり。芝增上寺の本は、他の明本、元本と共に今や國寶になつて居るといふ。然るに是等の來歷如何といふことになると、吾輩の調査未だ行届いて居ない。

起稿の由來

之を要するに、吾輩未だ大藏經の史的研究を爲さずに居た。一切經の由來を一向考へずに居た。處が昨年十一月三日を期し、東京の佛教徒の中に於ける、或る團體の發企により、「大藏會」なるものが開かれた。而して吾輩、右發企人よりして、其の當日必ず一場の講演を致すやうとの所望に預かり、之を辭することが出來ぬことに至つて來た。そこで聊取調るところ

刊行の趣意

あつて、該講演を申譯までに濟ましたことであつた。

處が、吾輩は毎月「人道講話」なる小雜誌を發刊して居る。而して本年一月號の原稿に深く窮した餘り、遂に右講演の原案を「人道講話」に載せ、以て世に公にした。然るに何をいふにも、匆々の所爲なれば、頗る不整頓にして、研究の行屆かざるは固よりのこと、記述亦實に其の宜しきを得て居ない所が頗る多かつた。そこで聊これを訂正する所あつて、此に別冊となし、以て有志に頒つことにしたのである。

## 一切經の由來 終

大正四年三月三日印刷
大正四年三月[illegible]日發行

定價金參拾五錢

著作者　村上專精
發行者　東京市小石川區丸山町十一番地　岩上行坡
印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　仙葉元太郎
印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第二工場

不許複製

發行所　東京市小石川區丸山町十二番地　振替東京二〇三二四番　人道講話會　電話番町四一五三

324
435

7361

## 綱領

一、人道講話は村上先生の人道講話を毎號連載するものとす。
二、人道講話は教育宗教及び道德の三面を有す。
三、人道講話は精神の涵養を以て教育の本領とす。
四、人道講話は人道の實踐を以て宗教の要務とす。
五、人道講話は父母の孝養を以て道德の大本となす。

## 人道講話會規約

一、本會は教育道德及宗教に關する講話を直接又は通信に依つて聽かんと欲する者を以て組織す。
一、本會の本部を東京小石川區丸山町十二番地東洋高等女學校内に置く。
一、本會は文學博士村上專精氏を推して會長とし其他幹事一名事務員若干名を置く。
一、本會は本會の目的を達せんが爲め毎月一回講話會を開き雜誌『人道講話』を發行す。
一、本會は何人をも選ばず入會を許す。
一、本會に入會志望の者は住所姓名を記し、一箇年以上の會費を添へ本會本部に申込むべし。
但し會費一箇月金六錢一箇年金七十二錢とす。
一、本會々員には毎月一回雜誌『人道講話』を配賦す。
但し會費前金切の節は會費の納附あるまで雜誌の發送を停止す。

東京市小石川區丸山町十二番地
人道講話會本部
振替東京二〇三二四番
電話番町四一五三番

75

324
435

終